大地

22号
1993. 3. 20
真宗大谷派 浄国寺
☎（23）5724

俳句五句

山崎　睦

余生なほ小さき夢持ち初暦

雪のなき寒嬉しくも不安でも

枯れ果てし草それぞれの枯ざまに

吹雪く道風に背を向け小走りに

亨保雛幾物語り秘めるらん

日記より

山崎武雄

一九七六年（昭和五一年）

三月十一日（木）晴

晴れて気持ちよく、雪も消えたので寝間の外の雪囲いをはずし、盆栽を出してやる。裏の池を見ると小さな鯉は雪に押されて死んでいたが大きなのは生きていた。昨冬小生入院の為、家の中へ取り込む暇なく諦めていただけに格別嬉し。その生命力の強さに驚嘆する。夜は家中又皆そろい、楽しく夕食をしテレビなど観て就寝。

三月十八日（木）晴

滝寺の飯塚さん冬囲いはずしに来てくれ、前全部と後七部通り済ましてくれる。木々も大部傷んだが囲いがとれて生々として気持がよい。花の盛りが楽しみである。

午前、最賢寺さん見え読経。典栄君、新大教育学部入学の由伝えられ姫川原の事心配になり、ラジオを入れるが放送せず。昼前ヤス子よりの電話にて合格を聞きホッとす。午後、睦と共にお彼岸の打敷等をかける。

三月十九日（金）晴

祖父の祥月命日である。お供えに翁もなかを上げて読経す。

午前十一時三十二分の汽車で春日さんと共に長野日赤※へ行く。吉池、羽入田、和田、持田、春日、義家の七人。羽入田氏より時に大きな声を出すこと、吉池氏より五音なら先ず四音で切って発音してみることなど注意さる。

夕方より雪ちらつく。

※食道発声法の講習会のため定期的に長野日赤に通っていた。

前住職十三回忌法要並記念講演会のお知らせ

一九九三年五月二十三日（日）
浄国寺本堂にて
講師　佐賀枝弘子先生

講師の佐賀枝弘子さんは、富山県魚津市在住
法蔵館季刊誌『ひとりふたり』編集長をはじめ『同朋新聞』その他の執筆、講演等幅広く活躍しておられます。
追って御案内申しますが、是非多勢御参集下さい。

「賽銭箱始末記」

あるべき所にあるはづのものが突然無くなる、というのは妙なものだ。それはいつもそこにあっていつまでもそこにあり続ける筈のものと決めていたから、無くなったと気付いたその時も、俄に信じることができない程だった。

そんな風に去年の八月十四日、本堂のおさい銭箱が忽然と姿を消してしまった。お焼香台の陰に隠れるようにして置いてあったその箱は、私がこのお寺へ来るはるか前からそこにあり続けたのである。夫やその姉弟達が子供の頃、そのおさい銭箱は春日新田の土肥さんの手によって造られてお寺に納められ、皆が見守る中、父の筆で「賽銭」と書き入れられたと聞いている。欅で造られた箱は小ぶりながら結構風格があり、すっかりこのお寺に馴染んでいたのだ。

もう何年も前に、おさい銭箱がまるで空っぽになっているということが二・三度続き、それと前後して見知らぬ子供が本堂をウロウロしているということがあった。

家族のそれぞれがずぼらで、一年三百六十五日、家のどこにも鍵をかけることがないのがあたり前の暮しになっていたから、そして又お寺という性格上、常に誰彼がお詣りをしていても不思議はないわけで、無用心といえば無用心極まりなしといった状態だったのである。

おさい銭箱に鍵をつけるというのは、何だか守銭奴めいていて、いかにも根性がケチくさい感じで家人の誰もが気にそまなかったのだけれど、人に悪心を起こさせるのも良くないしということで、やむなく小さな南京錠がつけられたのだった。それから十数年はことなきを得ていたのである。

お盆の八月十三日は午前六時頃の墓参を皮切りに、夕方をピークにして八時、九時までお寺が一番賑わう時である。檀信徒の人々とその縁につながる様々な人々が、まさにひきもきらず訪れ参詣をし本堂におまいりをする。そんなふうにお寺の内外は全く往来と何ら変らぬ様相を呈し、日頃からよく見知っている人々も全く知らぬ人も又、出たり入ったりするのである。

九時頃を目途に墓地の見廻りをして火を確かめ提灯の火をおとして戸締りをする。

以上が毎年同じように繰り返される八月十三日の朝から晩まで。一九九二年のお盆も又、何ら変ることなく同じように過したのだったが……。

翌十四日は十三日に間に合わなかったか、敢えて混雑を避けて来られる人々で、墓参する人影もずっとまばらになる。そして十四日のお昼過ぎ、墓参の人達を向拝に見送った時は何ら異常はなかったはづだった。いちいちおさい銭箱の有無を調べはしないが、あるべき所にあるはづのものがちゃんと在ったのであろう。全く異和感は覚えなかったのだから。

夜に入って八時近く、戸締りに行って様子が少しおかしいと気がつき、それでもその時はまだおさい銭箱が消えているという事態を即座にはのみこめなかったのである。「アレ？」と思っても、それは家人の誰かによって片付けられたに違いないと思うばかりで、その存在を疑う余地などまるで無かったのである。しかしながら、い

ちばん厭な事態＝盗難に遇ったと知るまでにそんなに長い時間はかかる訳もなく、お盆の十四日の夜は何ともいえぬ気持の悪さと共に更けていったのである。

私達にとってはむしろおさい銭箱そのものが惜しくて、惜しいというよりはむしろ痛ましい程の思いで忘れ難い程の思いがあるのだ。せめて箱だけでも見つからないだろうか、返してくれないだろうかとの望みはついに実現することなく、とうとう次のおさい銭箱を迎えたという次第。今までより大きければ何だか欲張っているみたいだし、小さければ又気軽に持って行かれても困るしと、あれこれ評定の末、以前のよりはやゝ大き目のごく地味なしつらえものを頼んで、前と同じ場所に、もう古くからそこに在り続けていたように納まっている。

このことを契機に私共の暮しぶりに些かの変化が起きた。ずぼら故に決してかけたことのなかった鍵をまめにかけ始めたのである。しかしそれだとていつ迄続くのやら。喉もとすぎてほとぼりのさめる頃になれば：甚だ心もとなく頼りのないはなしである。

泡（バブル）

山崎隆昌

「バブルが弾けた」と言うことがマスコミ等で頻りに使われる。この使われ方はどうも嫌な感じがする。バブルが全て悪く、自分にはまるで責任が無いみたい。バブルとは泡のこと（英語で言うと何でも尤もらしくきこえる）。泡（バブル）が人々の生活に豊かさと潤いをどれくらい与えてくれているか測り知れないのに。もっとも昔から「泡銭（あぶくぜに）身につかず」といわれてきたこともあるが。

泡のことで思い出すことがある。僕がまだ小学生の低学年の頃だからもう四十年も前のことになる。その一つはシャボン玉遊びのこと。その頃、液体洗剤や粉石鹸など家にはなく黄土色した固形石鹸がもっぱらであった。空き缶や空き瓶の中に石鹸を小刀で薄く削り入れ、それを水で溶く（もちろん水道は無く、横に流れる小川の水）。何故かそれに松ヤニを加えて混ぜて、シャボン玉液の出来上がりだ。よく乾いた茅の茎でストローを作りゆっくり吹いてシャボン玉を飛ばした。陽光に当たってキラキラ光り、空中を泳ぐ様が美しかった。

二つ目は風呂での泡遊びのこと。入浴がまだとても贅沢とされていた頃のことである。セルロイドの石鹸箱の蓋をよく濡らした手ぬぐいで（タオルではない）きちんと包み、表面をピンと張る。そこに石鹸をぬり蓋のふちから息を吹き込む。するとかぶせた手ぬぐいの表面に泡がボコボコ山盛り出来る。単純なことであるが遊ぶことに飽きなかった。

この泡の思い出は弾けることなく心の中に残っている。

泡に譬えるのは、外皮ばかりで中身のない事らしいが、そのように考えれば、バブル経済ばかりではなく、バブル政治、バブル大学、バブルスポーツ、バブル音楽等々、これも皆弾けてしまうのだろうか。何よりも悲しいことには、バブルは、人の生き方そのものであり、そしてバブル人間が弾けたとき、何が生まれるのだろう。

ある ケーキ屋さん

山崎慎子

「パテスリー・ギー」これは昨年の十二月横浜のある街に開店したケーキ屋さんの名前である。このお店の名前の由来の主でもある儀平さんは、高田出身の六〇才前後の男性。ある自動車メーカーに長い間勤めていたのだが、定年を待たずにそこを退社したのは何年前だったろうか。

数年前の夏の日お墓詣りに見えた儀平さんは実は退職をして、今は日本で唯一の本格的なお菓子の学校に通っているのだと話してくれたのである。

お菓子づくりが結構好きな私は（といっても私の場合はほんのまゝごと程度）何だかとても嬉しくなってしまって、玄関先でいとま乞いをする儀平さんに、つい思いつくままの質問をあびせてしまった。

テキストというものは格別なくて、先生が造るのを片っ端からメモをし写真にとること。帰宅してからはそれを丹念にノート整理していくこと。そのために十二時前に眠れないこと。そんなことを語って下さる儀平さんの、なんとイキイキと輝いていたことか。かたわらの夫人が穏やかにニコニコしていらっしゃるのも好ましい限りだった。

それまでお勧めしていた会社の同僚へのお餞別返しには手製のお菓子を差し上げるのだと聞いて、つくづくお菓子造りへの思いの深さを知らされたのだった。「クルマ屋さんから、まるで百八十度の転換ですね」とまことに平凡な私の感想に儀平さんは「いやぁ、造るということではクルマもお菓子も同じことですよ」と実に淡々とこともなげにおっしゃったのである。「ゆくゆくはお店でも開かれるのですか」と私は又も俗なことを尋ねる。「そこまでは考えていませんよ。今はただ学ぶのみですから」

そんなことに出会った日の気分が一日さわやかで上々だったのは言うまでもない。家族に話し、友人に話し、私はまるでその素敵なことがらを、自分の手柄が少しはあるような気にさえなった程だ。

そして昨年の秋の初め、自宅の庭先に小さなお店を開店する予定であることを聞いて、なんだか自分自身の夢が実現するような嬉しさに包まれた。

お得意のチーズケーキを主体にしたケーキを並べる予定であること。片隅ではお茶を飲みながらそのケーキを味わえるようにすること。音楽はあくまでもクラシックにこだわること等々……。

パテスリー・ギーの店名の由来はオーナーである儀平さんから、フランス風にGuyと命名したのだとは、儀平さんと親交が深く、名付け親でもあるフランス通のK氏の談である。

いつの日かパテスリー・ギーを訪れてクラシックを聴きながら、Guy氏のケーキを是非食したいものだ。横浜の風を受けながら。

あとがき

「大地」22号をようやくお届けします。随分予定より遅れてしまいました。申し訳なく思います。間もなく木々の芽吹きの美しい季となります。皆様それぞれに明るい春を迎えられますように。（隆）